〈青森県史〉の窓 72

津軽氏発祥の地　種里
～守り継がれた廟所～

蔦谷大輔
（県民生活文化課
県史編さんグループ　非常勤嘱託員）

本丸跡の西側にある光信公御廟所（2010年10月・蔦谷大輔撮影）

津軽のシンボルともいうべき岩木山。城下町弘前から眺めると、3つの峰が並んだ壮大な姿を見せる。この弘前から見た岩木山を仮に正面とすると、岩木山の背後から3つの峰を眺めることのできるところに、弘前藩主津軽氏とゆかりのある場所がある。それは種里城跡（現鰺ヶ沢町、国史跡）である。

江戸時代に弘前藩が作成した系譜類によると、1491（延徳3）年、久慈（現岩手県久慈市）出身の大浦光信により、種里城は築かれたといわれる。大浦光信は、津軽氏の祖先に位置付けられる人物であり、1502（文亀2）年に大浦城（現弘前市賀田・五代周辺）を築くなど、大浦（津軽）氏の津軽支配の礎を築いた存在であった。

城跡の発掘調査が現在も継続されており、出土品などの分析により、先述の光信が種里を拠点とした時期とおおむね近い分析結果が得られている。また、光信死後の16世紀後半以降、種里城は廃城となり、大浦氏の拠点は大浦城に移されたとされるが、出土品から、しばらく城が利用されていた痕跡があるという（『青森県史　資料編　考古4』〈青森県、2003年〉）。

さて、種里城跡には、光信と特に関わりの深い場所がある。それは本丸と推定される郭から西側の階段を下りた先にある光信公御廟所である。1526（大永6）年に死去した光信は、遺言により種里城内に鎧を着装したままの立ち姿で埋葬されたといわれる。この墓の場所が、現在の廟所とされている。

この廟所は、江戸時代以降、多くの人々の手によって整備・管理されてきた。1763（宝暦13）年9月、藩は廟所の周囲を柵で囲うことを止め、古来の通り柴垣にして小松などを植え付けるよう作事奉行と郡奉行に命じた。廟所を本来の姿に戻すことにより、単なる故地ではなく、津軽氏発祥の聖地としての意味合いを持たせる目的があったと考えられる。

1798（寛政10）年10月、藩は足軽目付に廟所の検分を命じ、詳細な報告を受けている。それによれば、毎年7月7日に、種里村の村人がこぞって廟所の草刈りに参会し、子供たちも大勢遊びに来て草刈りをしていたという。廟所自体の管理・整備は藩が行っていた一方で、廟所周辺は管理者が特定されているわけではなく、種里村が整備・管理を行う、いわゆる村中抱えとなっていた。

廟所の清掃は現在も、種里八幡宮の例祭に合わせて実施されているという（『鰺ヶ沢町史　史料編』〈鰺ヶ沢町、2003年〉）。津軽氏発祥の地のシンボルとして、今も廟所は守り継がれている。